

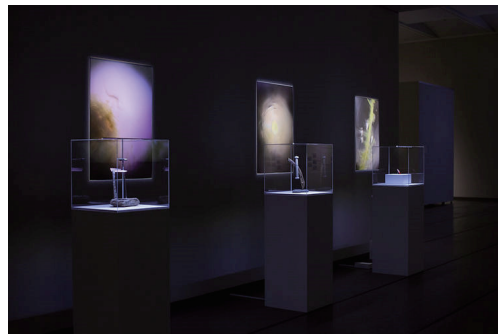
石橋友也《Self-reference Microscope》(2025)

《Self-reference Microscope》は川で拾ったゴミや自然物によって顕微鏡を作り、その川の水を覗くことを試みるプロジェクトだ。この自己言及的な観察行為を通じて、微視的な世界に対する人間の欲望や創意工夫のあり方や自然と人為の入り交じる今日の「環境」概念について思考する。

私は2024年の夏から秋にかけて、生まれ故郷を流れる荒川の周辺でゴミや自然物の収集を行った。荒川は東京と埼玉県を流れ、経済的にも文化的にも極めて重要な河川だ。また400年前から現在にかけて、人間の手による大規模な流路の改変が行われている人工的な側面の強い河川でもある。

私は顕微鏡の歴史を遡るようにしながら、最終的に3つの様式で3台の顕微鏡を制作した。①水滴レンズ。水滴の拡大効果を利用したシンプルなレンズ。川で拾った五円玉や石、伸縮性の網の柄などを使って制作した(左図、表紙はこれを用いて河川の水を覗いた観察画像。藻や何らかの小動物が見える)。②複式顕微鏡。対物レンズと接眼レンズの2枚のレンズを持つ、現代の顕微鏡の基礎となったスタイル。17世紀にイギリスのロバート・フックが開発した。私は川で拾った2枚のアクリルレンズを用いて、これを制作したが、失敗に終わった(上右図)。③レーウエンフック式顕微鏡。数ミリ程度のひとつのガラスレンズで構成されるシンプルな顕微鏡。17世紀にオランダのアントニ・ファン・レーウエンフックが開発し、世界で初めて“微生物”の存在を報告した。私は川で拾ったガラスゴミから、この顕微鏡をつくることに挑戦した。

展示では、これら3台の自作顕微鏡とそれぞれの顕微鏡によって得た観察画像、試行錯誤のプロセスをまとめたビデオによって構成した。本作は、自然と人為が入り混じった今日の環境から取り出した拾得物によって顕微鏡をつくり、視ることによって、我々が普段接する精密につくられた顕微鏡やメディアを通じた微視的な世界を解体し、「微視的な世界を見る」ことに潜む情熱や創意工夫、人類が蓄積してきた時間、微視的な世界に流れる時間のあり方を再考させる。



石橋友也 Tomoya Ishibashi

1990年生まれ、埼玉県出身。大学では生物学を学ぶ。品種改良種、文字、人工知能などへの関心に基づき、自然と人為の境界を探索する芸術実践を行う。近年は、生家の周辺である荒川流域のリサーチに基づいた制作を展開する。2012年より早稲田大学生命美学プラットフォーム「metaPhorest」に所属。2023年情報科学芸術大学院大学(IAMAS)博士後期課程入学。主な受賞に文化庁メディア芸術祭優秀賞(2021)、第25回岡本太郎現代芸術賞入選(2022)など。

<https://www.shibashiishibashi.com/>